

意味と友情の架け橋—新しいヒューマニズム、ミルチャ・エリアーデから荒木美智雄

ダヴィ・カラスコ

まず、新しいヒューマニズムという重要な概念についてお話をさせていただく良い機会を与えてくださった庭野平和財団に感謝申し上げます。また、リチャード・ガードナー、村上辰雄両先生には、さまざまご援助をいただき、ありがとうございます。そして今回、共に来日した家族が素晴らしい経験ができるようお世話くださった谷口智子さん他の皆さんにお礼を申し上げます。

新しいヒューマニズムについてお話をする前に、私の人生と仕事について少しお話をさせていただきます。私はメキシコ系のアメリカ人で、父方は数世代に渡って学校の教師でした。祖父のミゲル・カラスコは、アメリカとメキシコの国境沿いに居住するメキシコ人のため、1925年に学校を創立しました。この学校は、精錬工訓練学校と呼ばれました。後年、私の父もエルパソ職業部隊センターを創立して、低所得で貧困にあえぐ学生たちに職業訓練を行いました。教師であった父とアーティストであった母が、第二次大戦直後に仕事を探して家を離れたときに、私は祖父母に養育してもらいました。

私が10歳のとき、祖母の肌が美しいことに気付いて、どうすれば肌をそんなにきれいに保てるのかとたずねました。祖母は私に近寄り、体をかがめてささやきました。「私は秘密の特効薬があるのさ。お前がいい子なら教えてあげるよ。」私は、「僕はいい子だから教えてよ」と言いました。すると祖母は私の耳にささやきました。「私の秘密の特効薬はね、お祈りだよ、お祈り。あと一つはよい化粧品ね。」

彼女はその秘密の特効薬の話をして、二つの大切な教訓を私に与えました。まず、瞑想と祈りと超越的他者を信じることの大切さ。そして化粧品についての祖母のコメントは、顔や仮面に関わる技術に注意を払い、他人に良く見えるよう努力することを教えてました。

実は、私のメキシコ人の祖父母は横浜で5年間暮らし、日本人のキリスト教平和主義者である賀川豊彦先生に大変興味を持ち、彼のコミュニティーに参加しました。こういった全てのことが、私が宗教学者になる上で、何か重要な影響を与えたと思います。

私が理解するところでは、宗教学において、新しいヒューマニズムは橋渡しの概念であり、それはミルチャ・エリアーデによって想起され、ジョゼフ・キタガワ、チャールズ・ロング、そして荒木美智雄やその他大勢によって展開されました。今日の私の講演は、日本とメキシコとアメリカ合衆国との間で、様々な考え方や人、意味、友情を結び付けることで、新しいヒューマニズムを体現しようとした私の親愛なる同僚で友人である荒木美智雄にささげます。今日の午後、この場には亡くなった荒木美智雄の奥さまもご臨席のことをお伝えしたいと思います。

今日の私の話は、連帯と友情に関する三つの架け橋についてです。

第一の橋は、ミルチャ・エリアーデとジョゼフ・キタガワとの間に築かれたもので、1958年の彼らの来日が契機となっています。この旅は、私が新しいヒューマニズムの初期の主要例とみなす、エリアーデの重要論文「宗教学と新しいヒューマニズム」と、ジョゼフ・キタガワの著書『東洋の諸宗教』の誕生を助けたものと考えます。新しいヒューマニズムの初期ステージです。

第二の橋は、第一の橋の延長線上で、ジョゼフ・キタガワとシカゴ大学で彼の学生であった荒木美智雄を結び付けました。そしてその橋の結果として生まれたのが、荒木の博士論文『金光大神と金光教—宗教的媒介の一事例』でした。後述するように、この博士論文は宗教学、特に民衆宗教に関する後日の荒木の教育、著作、コミュニティー構築の基盤となったのです。

第三の橋は、大学院生としてジョゼフ・キタガワとチャールズ・ロングの指導を受けていた荒木美智雄と私を結び付けました。われわれの間には友情が育ち、それぞれが学者、教師と学生から成るグループをつくるて共同作業をし、人類の宗教経験と表現を理解しようとしたのです。われわれのグループのメンバーはメキシコ、アメリカ合衆国、日本で参集しました。アフリカ系のアメリカ人教師である、チャールズ・ロングと彼の弟子たちを日本に連れて来たのは荒木美智雄でした。荒木と荒木の学生たちがメキシコで参加した研究プロジェクトの様子については、後程お見せするつもりですが、アステカ帝国の寺院に関する研究、グアダルーペの聖母の顯現についての研究、そしてオックスフォード・メソアメリカ百科事典の編纂に関わるものでした。

本公演では直接取り上げませんが、これらの三つの橋の延長線上に生まれた新しいヒューマニズムの研究として、庭野平和財団による出版プロジェクト『宗教と宗教学のあいだ—新しい共同体への展望』をあげたいと思います。このプロジェクトは、もともと宗教者と研究者の対話を構築しようとした荒木美智雄の努力から始まり、後に、リチャード・ガードナーの粘り強く創造的な編集能力によって完成したものです。

第一の橋 「ミルチャ・エリアーデとジョゼフ・キタガワと松島の岩」

60年前、偉大な宗教学者、ミルチャ・エリアーデが、同僚のジョゼフ・キタガワとともに日本にやってきました。その時エリアーデがそこで学び深く心に刻んだことは、彼の著書『エリアーデ日記—旅と著作と人』の「松島の岩」という章に記されています。彼が日本の魂と呼んだものとの出会いは、彼が3年後に書いた「宗教学と新しいヒューマニズム」という論文に大きく影響したと私は思っています。

エリアーデは日本についての章を、天と地がいかに近かったかという日本に伝わる天地創造の神話から始めています。

「ある日、よそ者が、ほとんど頭が地面に着くほど腰を曲げて歩きながら村へやって来た。なぜそのように歩くのかと尋ねられて、よそ者は、自分の国では空があまりにも低いので、まっすぐに立つと頭が青天井についてしまうんだと答えた。」

エリアーデはこれを、天国が地上にとても近いので、人間はいつでも神々に会うことができたという楽園神話だと解釈します。しかしこのような原初の時の天と地の近さは、人間の愚かさや悪行で破壊され、神々と人間は引き離されてしまいます。エリアーデは、彼がいうところの「素朴で真正な神社の気高さ」や、アメノウズミの恍惚の舞、そして鼓を打ち人形を使いエリアーデの家族の秘密をあの世から伝えた女シャーマンの中に、日本人の神々と再び結ばれたい憧れが反映されていると感じました。これにより、エリアーデは、日本人の魂は具体的な聖なるものの顕現を求め、原初の時に天地を結んだ天浮橋（あめのうきはし）に思いをはせると主張しています。

エリアーデが日本での体験を語ったこのような言葉の中に、私はエリアーデが新しいヒューマニズムについて示した四つの提言を感じ取ります。1ベトナム戦争や人権運動の真っ只中だった60年代アメリカで、彼は以下の通り言っています。

1) 西洋の歴史は、今、アジアや先住民文化の宇宙観、儀礼、人々と対立している。これらの人々は、以前はわれわれの研究の対象物だった。今や彼らは主体性をもった人々、祖先、聖地となり、これまでいかに誤って描写され誤解されてきたか異議を申し立てるだろう。

2) われわれの課題は、これらの文化が豊かな宗教的土壤の中で育まれてきたことを理解することだ。資料や文献は、宗教経験と宗教表現がわれわれの研究の焦点にならなければならぬことを示している。

3) 西洋人はこれまでアジア的、アルカイック的思考による問題提起とその解決策を無視してきた。しかしこれらの創造的解決こそが人間の生をより深く理解するのに役立つ。

4) われわれに必要なのは、隣接諸分野間の協力と対話であり、経済学者、心理学者、文学評論家、歴史家、宗教学者を含むチームであり、新しいコミュニティーである。私はこの4つ目の提言を「アンサンブル手法」と呼んでいます。これは、一つの楽団でも多くの楽器が合奏する上では必要で、一つの楽器だけでは音楽をつくれないのに似ています。人間の文化と歴史の宗教的側面の理解には多くの分野が必要なのです。

¹ エリアーデは、1961年に発表した「宗教学と新しいヒューマニズム」という論文を、1969年に出版した The Quest という論文集に「新しいヒューマニズム」というタイトルで再掲載したという点について、ここで確認しておきたい。

もう一つ、エリアーデが示したこれら四つのポイントを表す例として優れていると私が感じたのは、ジョゼフ・キタガワの『東洋の諸宗教』でした。これはキタガワ、エリアーデ、ロングが新しいヒューマニズムを展開しようとしていた時期である1968年に出版されました。以下に、ある主要学術誌に掲載されたその著書の書評の一部を引用します。上で記した四つのポイントのほぼ全てがそこに見られるところに注目してください。

「キリスト教のみが教会の独自性を主張できるという、通常の宗教学者の前提から離れて、著者は東洋の諸宗教の中に、教会に匹敵する「聖なる共同体」をみつけ、そのエトスと構造を明らかにしようとする。それにつきキタガワ氏が尽力するのは、歴史的事実と、その構造と解釈との間のバランスの維持である。キタガワ氏は、宗教とは個人が集まって、コミュニティーをつくり、それぞれのコミュニティーはメンバーである信者個人のライフサイクルとは独立した、独自の成長のペースと法則を持つことを認識している。著者は現在、西洋社会に身を置く東洋人であり、東洋人としてのアイデンティティを失わず、西洋と同一化しようと試みている。本書は大学生や一般人に対し、偏りのない比較宗教学の研究の出発点を与えるよう書かれている。急速に変化する現在の世界で、本書は隣人たちの信仰を理解しようとするものにとって、豊かな解釈材料を提供するものといえよう。」

ここで私が気付いたのは、キタガワは、新しいヒューマニズムに関して五つ目の提言を付け加えていることで、それはコミュニティーの強調です。さらにキタガワはヨアヒム・ワッハから、信者のコミュニティーの大切さのみならず、研究者のコミュニティーを作ることが宗教を理解する上で重要であることを学びました。同様に、チャールズ・ロングも、新しいヒューマニズムにおいてコミュニティーが大切であることを、今回の私のこの講演に関連付けて以下のように言っています。

「ジョゼフ・キタガワがシカゴに学びに来て、のちに教え始めたとき、彼は日本人学生がシカゴに来るという伝統を作った。キタガワは橋だった。彼はまた、ウイリアム・ラフルーア、リチャード・ガードナー、ゲリー・エバソールらアメリカ人学生も指導し、彼らは日本に行き、幾人かはそこに住み働いた。そういった中で、荒木美智雄が新しい橋になり、日本、アメリカ、メキシコから集う研究グループを作る役割を果たした。」

第二の橋「ジョゼフ・キタガワと荒木美智雄」

まずは、日本からシカゴに行き、そしてまた日本に戻った荒木美智雄について話します。エリアーデがヨーロッパ人としてアメリカに行って、そして日本にも赴き、アメリカに帰ったのとは異なり、荒木は日本人としてアメリカに行き、祖国を遠く離れたシカゴで、日本の宗教の深い意味と歴史を学ぶこととなりました。京都大学で学士号と修士号を取得した後、荒木はまずマサチューセッツ州のウイリアムズカレッジで学び、1967年にシカゴ大学の神学大学院に入学しました。われわれは1970年にそこで出会い、友人となり、共にエリアーデから学びました。

少し前に、エリアーデが、以前、宗教学の研究の対象物だったものが、新しい主体となり、人間の宗教経験に新たな声と物語をもたらすと主張したと私が言ったのを覚えていらっしゃるですか？荒木はキタガワとロングから、日本人、特に日本における新宗教運動の創始者たちの自伝の研究に価値があることを学びました。エリアーデが一つの文化の持つ創世神話を知ることを奨励した一方で、荒木は別の宗教の始まり、つまり諸宗教の開祖とそのライフ・ストーリーに大きく注目するようにと指導を受けたのです。これによって、人間の生活、宗教経験、コミュニティーに関する、より歴史的な研究態勢が整ったのです。この新しいヒューマニズムの重要な要素は、リチャード・ガードナーの研究の中で、特に『宗教と宗教学のあいだ』に収載された高見敏弘の人生への注目にも見て取ることができます。

ここで皆さんにはっきり申し上げたいのは、荒木と私にとって、日本人のライフ・ストーリーを知ることが、そしてメキシコ人のライフ・ストーリーを知ることがいかに大切なことだったかです。当時のアメリカ社会での実体験として、われわれは軽視され、周辺に追いやられ、社会的にも文化的にも劣る存在として扱われていたのです。「そんなことは例外だ。なぜなら全ての国民が自由で平等なのだから」と国家は繰り返し主張します。しかし、メキシコ系アメリカ人として、黒人、黄色人種、白人の中に生活していて、われわれメキシコ人は何度も差別され続けてきました。例えば、我が家隣人たちは、私の父がメキシコ人だから、私が混血の子どもだから、近隣の不動産価値を下げてしまう恐れがあり、私たちの住む近所では誰も家を買いたくないだろうと言いました。また幾つかのレストランでは入店を拒否され、「やってきたところへお帰り、あんたたちはここの人間じゃないからね」と何度も言われました。

この時代、メキシコ人、黒人、日本人は、さまざまな状況で、テレビで、映画で、学校で、絶えず笑いの種にされ、さげすまれ、侮辱されたのです。リチャード・ガードナーは『宗教と宗教学のあいだ』の序論で、この問題をアメリカ社会のおぞましい側面として取り上げています。ですから、キタガワやロングが新しいヒューマニズムを唱え、アジア、ラテンアメリカ、先住民の人々や文化の中に、人類の英知が存在すると説いたとき、荒木と私は、開放されたと感じ、学問と教育を通じて、偏見に反対し立ち上がるうと思いました。荒木と私は、神学大学院やレーベンスタイン図書館で共に学びながら、このことにつ

いて多く語り合い、大学教員になった暁には、研究と教育活動を通じてこの問題に取り組む学生たちを育てていこうと誓いました。

それではここでまた荒木の話に戻って、1982年に彼が提出した博士論文『金光大神と金光教—宗教的媒介の一事例』について見てみたいと思います。我々は彼の博士論文から、日本の宗教や歴史の中で、無視あるいは過小評価されている側面について研究をしていくという決意が感じることができます。そしてその熱意と願望は、以下の論文の始めの言葉を見て取れます。

「この論文を提出することによって、私の人生の一つの重要な時代が、幕を下ろすことになる。しかし、日本の民衆宗教の豊かさや深さに比べると、私自身の知識や理解は非常に限られたものでしかない。ゆえにこの博士論文を持って、私の民衆宗教の研究の完成とするのではなく、そのままに始まりとしたい。」

荒木の論文は、それまで日本の研究者によって注意を払われてこなかった、日本の宗教と歴史に関する重要な側面を示しており、決して過小評価されるべきものではありません。私は荒木の博士論文をこのひと月で2回読み直しましたが、非常に洗練され、バランスの取れた、洞察富む五つの章から成っています。これらを全てここで要約するわけにはいきませんが、エリアーデの四つのポイントで示したように、荒木の新しいヒューマニズムについて、五つのキーポイントを挙げてみたいと思います。

1) 日本の深い宗教的土壤には、民衆宗教とエリートの宗教が含まれるが、それらは歴史的にみると、動的相互関係を持って発展を遂げてきた。この民衆宗教こそ、研究すべき対象である。

2) 民衆宗教や日本の新宗教へのアクセスの仕方としては、これは金光教の場合にも見られるように、その開祖の自伝を通じてというやり方がある。その道をたどることによって、われわれはその開祖の宗教経験を理解するのみならず、その信者たちの体験についても理解をすることにつながる。

3) 民衆宗教を理解する際の一つの大きな課題は、いかに人々が聖なるものの両義性を経験したかを知ること、言い換えれば、それは神のやさしさとこわさの両面の理解である。

4) 民衆宗教の多くはその中心に、この苦難に満ちた世界に生きる人々による癒やしの求めがある。

5) 世界の他の地域の救済的民衆宗教運動との比較研究によって、我々は自らを脱周縁化し、日本あるいはその他の宗教のより広い理解を得ることができる。

荒木美智雄は特にこの四点目、日本またその他の地域の持つ、民衆宗教の癒やしの側面に非常に関心を持っていました。荒木から民衆宗教について学んだこととして、チャールズ・ロングは以下のように語っていました。

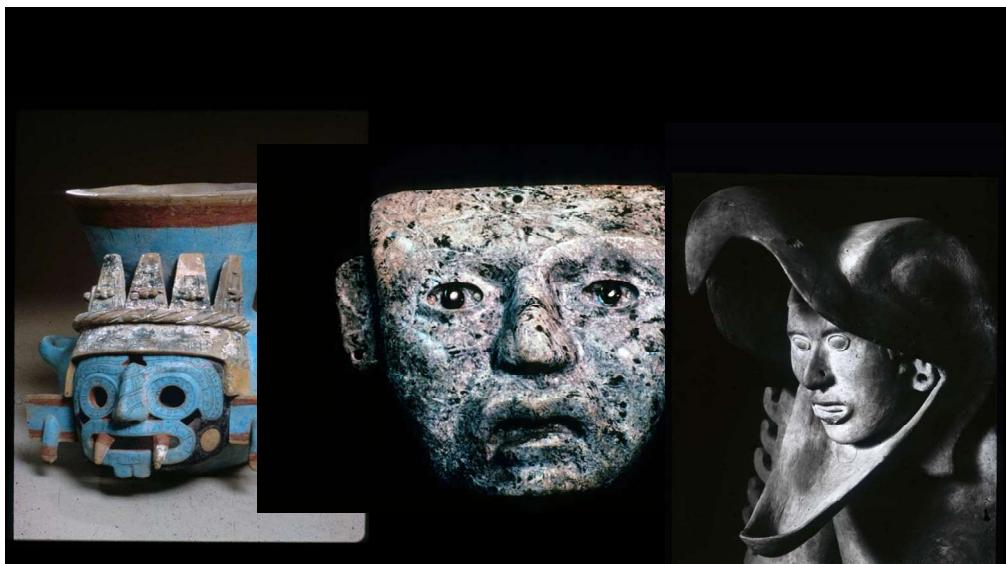
「初めて私が日本に行ったとき、美智雄がこういった新宗教の、約 15 もの団体のところへ私を連れて行った。中には西洋志向のものもあったり、古い日本の神話を再現しようとするものもあったりした。またある団体では太陽を飲み込む儀式を行ったりしていた。いくつかの団体の開祖は女性であった。実にバラエティに富んだものだった。しかしそれら全ての核心にあったのは、実に深遠なもので、それが原初志向のものであれ、近代志向のものであれ、その全ては「癒やし」に向かっていた。美智雄から学んだのは、日本の民衆にとって癒やしと近代は共に歩んできたということだ。」

第三の橋 「日本人学生とアメリカ人学生を日本、メキシコ、チャールズ・ロングへとつなぐ」

荒木美智雄と私、カラスコが、教育や著作を通じて、チャールズ・ロングの助けを借りながら、いかに新しいヒューマニズムのアプローチを実践しようとしたかという話をします。私は博士論文で、古代メキシコの文化と都市の創造を手助けしたケツアルコアトルという羽を持つ蛇の神について書きました。そして美智雄は美智雄で金光教についての彼の博士論文を完成させました。われわれはお互いに新しいヒューマニズムのアプローチを次の世代の学生に伝えて行こうと誓い合っていたので、しばしば連絡を取り合い、電話で話し合いました。われわれがシカゴで共に学んだ最後の年、メキシコで信じられないような発見がありました。1978年2月、考古学者がメキシコシティの国立大聖堂のすぐ裏で、アステカの月の女神の像が彫られた石板を見つけたのです。



この石板には、南ハチドリとして知られる太陽神の犠牲となって手足をもぎ取られた姿の月の女神像が彫られていました。この聖なる石板がここで見つかったということは、アステカ帝国の寺院がまさにそこにあったことを示しています。それはスペイン人によって破壊されましたが、その後メキシコ人によって発掘されます。その後、多くの発見が続き、以下でお示ししているような素晴らしい遺物が次々と発掘されたのです。



私は日本にいる荒木美智雄に連絡を取り、このように宗教学的に非常に意味あるアステカ帝国の寺院とその供儀に関する会議に、彼と彼の学生たちを招待しました。以下はその会議の様子の写真です。メキシコ人は、荒木のその知性、ユーモアのセンス、そしてメキシコと日本の宗教を比較してのコメントなどを非常に好意的に受け止めました。



また荒木は民衆宗教における聖なる丘への関心が非常に強く、メキシコの聖なる丘に出現するという愛と慈悲の聖女、グアダルーペの聖母の物語にも魅了されていました。そしてそれと、日本の觀音菩薩、あるいは慈悲の女神、神仏との比較にも考えをめぐらし、日本の民衆宗教とメキシコの民衆宗教とを熱心に比較研究しました。

さらには、1990年代に私がオックスフォード・メソアメリカ百科事典の編集主幹を務めた際には、荒木の弟子たちにメキシコとメソアメリカの宗教についての項目の執筆を依頼しました。岩崎賢には人神、笹尾典代には火の儀式、谷口智子には託宣についての記事を書いてもらいました。

また荒木は、チャールズ・ロングを日本に何度も連れて来て、多くの場所を訪れ、教室や公共の場で講演をさせました。シカゴ神学大学院卒業の数々の研究者もロングや荒木と一緒にこのように旅をし、また議論をしました。これは明治神宮で撮った写真です。



私は、この度、日本に来るにあたって、この写真に写っている人たち何人かに、荒木美智雄の思い出をぜひ送ってくれと依頼しました。多くの返事をもらいましたが、その中からいくつか紹介します。まず、荒木の学生であった曾野鈴子のコメントです。

「われわれ日本人の学生は、本当に先生のもとで一生懸命やりました。楽な先生ではなかった、多くのことを求められましたし。でも私たちは本当に先生が大好きでした。」

次に同僚であったジェイコブ・オルポナはこのように語りました。

「荒木美智雄は友人であり、我々に惜しみなく与えてくれた。彼は快活な心とユーモアのセンスを持ち合わせていた。そして我々の教師であるチャールズ・ロングの思想に深くコミットしていた。」

次のフィル・アーノルドは、今、シラキュース大学で教えていますが、もう何度もロング先生らと一緒に日本に来ています。フィルはこのような話をしてくれました。

「ある上智大学での会議の際、荒木は日本における宗教学の歴史についてとても熱く語っていた。その最中、突然、床が動き、建物が揺れだした。私は恐怖のあまり人生これで終わりかと感じ、アメリカの妻に電話をしなければと思った。それは私の人生初めての地震体験であり、実際にはすぐおさまったが、とても長く感じた。少し落ち着いてから周りの様子を見てみると、なんと荒木は少しも中断することなくしゃべり続けていたらしいことに気づいた。いつかあの時の会議の録音を聞いてみたいものだ。荒木には、たくさんの恩がありすぎて、どうお返しをしてよいやら見当がつかない。」

もらったコメントの全てに共通していることは、彼らの宗教に対する理解、さらには、自分自身についての理解は、荒木美智雄に会ったことによって変えられてしまったという点でした。

おわりに

私は今日、この午後、皆さんとこのように過ごせたこと、そしてまた家族とこの週を日本で過ごせたことを、とてもうれしく思います。最後にもう一つ、荒木とカラスコの物語ということでお聞きください。かつて来日したときに、荒木先生は私を歌舞伎鑑賞に連れて行ってくれました。「伽羅先代萩（めいぼくせんだいはぎ）」という歌舞伎の演目でした。その中で政岡という女性の話がありました。この彼女が、ある藩の世継ぎとなる7歳の子どもを暗殺者から命をかけて守るという、そういう話でした。彼女は自分の息子と世継ぎを自分の部屋に隠しました。子供たちはお腹を空かせていますが、食べ物はないまま隠れていなければなりません。一人の大人が必死に責任あるもののために忠義を尽くす、その姿に私は強く心を打たれました。

マサオカは唯一身近にあった茶道具で食事を準備し、子供たちに食べ物がくるよとなだめます。しかし彼女が与えられるのは精神的なケアとお茶だけです。お腹を空かせた二人の子供たちは若武者のように振る舞おうとしますが、本当に食べ物はくるのか、こっそりマサオカの様子を伺います。マサオカは知恵を尽くして子供たちの命を救おうとします。

この場面と演目は私に深い感銘を与え、それから時々「マサオカ」と意味もなく言って楽しんでいました。そしてこの言葉が荒木先生との友情を示す二人の合言葉になりました。私がアメリカから荒木先生に電話すると、荒木先生は「もしもし」と答えます。そこ

で私が「マサオカ！」と一言いります。そうすると荒木先生は「ケッアルコアトル！」と返します。そこで二人は大笑いするわけです。そして話の後電話を切る前にも2、3度「マサオカ」と連呼します。これは彼を「マサオカ」と呼んでいるのではなく、友情の表現なのです。そして荒木先生も「ケッアルコアトル」と言って電話を切ります。

それでは、最後に皆さんに、荒木先生の奥様に、そして荒木先生にマサオカとご挨拶して、この講演を終わらせていただきたいと思います。もしかすると今夜、妻と息子と橋のそばを歩くとき、彼のかすかなささやきが聞こえてくるかもしれませんね—ケッアルコアトルと。ご清聴ありがとうございました。